

【補註13】 Sāgala (サーガラ)

[0] サーガラには釈尊の事績として特記しなければならないようなものはない。この都城に関連する原始仏教聖典の記述として、一つはパーリの律蔵に於て、ダルヒカ (Daḥhika) という比丘がサーガラにいて、彼の弟子が盗戒を犯したのではないかと師に告白したが、師であるダルヒカが不犯と判定したという記事と、いま一つはアングッタラ・ニカーヤに於て、仏弟子のウッタラ (Uttara) という比丘がマヒサヴァットゥ (Mahisavattu) のサンケツヤ山 (Sankheyyaka pabbata) のダヴァジャーリカー (Dhavajālikā) にいて、彼が比丘たちに説法していたという仏弟子の説処として記されている。

このうち後者については、なぜサーガラに入れてあるかという疑問もあろうかと思うので、多少解説する意味で結論を先取りすると、マヒサヴァットゥという名称の由来は詳らかでなく⁽¹⁾、或る時期サンケツヤ山に冠されて呼ばれた地域名ではないかと推定される。そのサンケツヤ山は「サーガラ城 (Sāgala-nagara)」の地域にあったことが以下で示すように判明した。そこでサーガラに含めて解説することにした。

尚、この城は時代の経過とともに、いくつかの国の都市名として現れてくるが、仏教文献のなかで最初にこの都市名と国名が一緒に表現されるのは、*Jātaka* 533にある「マヒンサカ国 (Mahimsakaraṭṭha)」⁽²⁾ という国名からはじまるようで、その後ギリシア系のミリンダ王の王都として栄えた後、玄奘の時代には「磔迦国 (Ṭakka)」の古城としてその名が登場する⁽³⁾。

(1) *Chaṭṭha Saṅgāyana CD-ROM* 版の *Jātaka* 533 (vol.V p.337) に「往昔、マヒンサカ国のサーガラ城で、サーガラという名の王が国を統治していた (atite Mahimsakaraṭṭhe Sāgalanagare Sāgalo nāma rājā dhammena rajjaṃ kāresi)」とある。但し、PTS テキストには「サーガラ城 (Sāgalanagara)」は「サクラ城 (Sakulanagara)」と校訂し、「マヒンサカ国 (Mahimsakaraṭṭha)」も異写本に「マヒサラ (Mahisara)」、「マヒサカ (Mahisaka)」ともあるが、「マヒサヴァットゥ (Mahisa-vattu)」との関連は不明である。また玄奘の『大唐西域記』巻4に「数百年前有王号摩醯邏矩羅 (唐言大族)。都治此城王諸印度。有才智性勇烈」(大正 51 p.888 中)とあって、数百年前に摩醯邏矩羅 (Mihiragula) という王 (唐に大族 = Mahākula) がいて、このサーガラ城に都して治め、諸インドに王となったと伝えているが、この王とマヒサヴァットゥという地名との関係を直接結びつけるものは見当たらず、不明である。

(2) 上記註 (1) 参照。

(3) *SN-A.* (vol. II p.191)、*AN-A.* (vol. I p.175)、*Thera-A.* (vol. III p.130) にも「マッダ国 (Madda-janapada, Madda-raṭṭha)」の都市名として「サーガラ城 (Sā-gala)」とあるが、これはマガダ国の一部をなす国ではないかと見られている。赤沼智善編『印度固有名詞辞典』p.359b 参照。

[1] まずサンケツヤという地名の属性について述べる。

[1-1] サンケツヤの属性についてはA文献資料では、以下のものが知られる。

サンケツヤ山 (Sankheyyaka pabbata) : *AN.008-001-008* (vol.IV p.162)

[1-2] またB文献資料では、以下のものがある。

サンケツヤの僧房 (Sankheyya-pariveṇa) : *Milindapañha* (p.019)

泄坻迦寺 : 失訳『那先比丘経 (A)』巻上 (大正 32 p.695 中)、失訳『那先比丘経 (B)』巻上 (大正 32 p.705 上)

[1-3] 上記で紹介したように、A文献資料の *AN.008-001-008* (vol.IV p.162) では、サンケツヤという地名の属性が「山」であるのに対して、B文献資料の *Milindapañha* では「僧房」となっていて、これに相応する両漢訳『那先比丘経』も「泄坻迦寺」と、その属性を「寺」にしている。「泄坻迦」は「Sankheyyaka」の音写であろうから、A文献資料とB文献資料との間にはその属性が「山」から「僧房」ないしは「寺」へと変遷したことになる。この点については後に述べる。

[2] 次にサンケツヤ山もしくはサンケツヤの僧房はいかなる都市にあったかについて述べる。

[2-1] A文献資料にはサンケツヤの所属する都市は次のようにある。

あるとき尊者ウッタカはマヒサヴァットゥのサンケツヤ山のダヴァジャーリカに住んでいた (āyasmā Uttaro Mahisavattusmiṃ viharati Sankheyyake pab-bate Dhavajālikāyaṃ) : *AN.008-001-008* (vol.IV p.162)

[2-2] 同様にB文献資料では、以下のようにある。

ときに長老比丘たちがサーガラ城に [行くと、] ……そのとき尊者アーユパーラがサンケツヤの僧房に住んでいた (atha kho therā bhikkhū Sāgala-nagaraṃ …… tena kho pana samayena āyasmā Āyupālo Sankheyyaparive-ṇe paṭivasati) : *Milindapañha* (p.019)

那先便転到天竺舍竭国。止泄坻迦寺中 : 『那先比丘経 (A)』巻上 (大正 32 p.695 中)、『那先比丘経 (B)』巻上 (大正 32 p.705 上)

[2-3] 上記 [2-1] で紹介したA文献資料の「マヒサヴァットゥ (Mahisavattu)」に関しては不明であるが、しかし [2-2] に挙げたB文献資料の *Milindapañha* によれば、「サンケツヤの僧房 (すなわち「坻迦寺」)」は「サーガラ城 (Sāgala-nagara)」と、両漢訳『那先比丘経』の「舍竭国」となっている。漢訳の「舍竭」はパーリ語の Sāgala の音写であろうから、サンケツヤの僧房 (「坻迦寺」) は「サーガラ城 (Sāgalanagara)」、すなわち漢訳でいえば「舍竭国」という都市にあったことになる。

[3] つぎにサーガラ城について述べる。

[3-1] サーガラはA文献資料に次のようにある。

そのときサーガラに於て、長老ダルヒカの弟子比丘が憂愁に打砕かれて、商人のターバンを盗み、ダルヒカ長老比丘に告白した。…… (tena kho pana sa-mayena Sāgalāyaṃ āyasmato Daḥhikassa saddhivihāriko bhikkhu anabhi-ratiyā piḷito āpaṇikassa veṭhanam avaharivā āyasmantaṃ Daḥhikaṃ etad-avoca ……) : *Vinaya Pārājika 002* (vol.III p.067)

尚、ダルヒカ比丘はターバンの値段が5マーサカ以下であると判断して、その弟子比丘に「波羅夷罪ではない」と判定したとある。

[3-2] またB文献資料には上記[2-2]に示した資料以外に、以下のものがある。

沙竭：『那先比丘経(A)』巻上(大正32 p.695中)

奢羯羅故城⁽¹⁾：『大唐西域記』巻4(大正51 p.888中)

沙柯羅国：僧伽娑羅訳『阿育王経』巻5(大正50 p.149中)

(1) 「奢羯羅」の音写として梵語 Śākala, 俗語 Sāgala, 巴利文 Sākala が挙げられる。水谷真成訳・玄奘『大唐西域記2』(東洋文庫655, 1999) p.120の註(1)、季羨林等校注『大唐西域記校注』(中華書局出版、1985、北京) p.354を参照。

[4] 次にサーガラ城の具体的な規模を検討する。

[4-1] サーガラのA文献資料について言えば、その規模を示す属性は不明であるが、上記で示したようにB文献資料の *Milindapañha* によれば「サーガラ城(Sāga-lanagara)」(p.019)とあり、また『那先比丘経』では「舍竭国」(大正32 p.695中、p.705上)とあることから、その規模は「城」や「国」(この場合の「国」は都市に相当)のレベルにあることが判明する。そうした都市にサンケツヤ山、あるいはサンケツヤの僧房(坻迦寺)があったということになる。

[4-2] またこのサーガラ城は『大唐西域記』巻4によれば、「奢羯羅故城。垣堵雖壞基趾尚固。周二十餘里。其中更築小城。周六七里」(大正51 p.888中)とあって、玄奘の訪れた当時は、後に述べるように大城すなわち新しい城から14、5里離れたところに古城として存在した。その奢羯羅古城は周囲20余里に及ぶ垣根の崩れた堅固な基台に囲まれ、その内側にさらに小さな古城があったと記していることから、その規模は周囲が6、7里の都市であったと推定される。このレベルの都市として『大唐西域記』には、阿耆尼国の都城(六七里)⁽¹⁾や跋祿迦国の都城(五六里)⁽²⁾、素葉水城(六七里)⁽³⁾・白水城(六七里)⁽⁴⁾・恭御城(五六里)⁽⁵⁾、忽憐国の都城(五六里)⁽⁶⁾あるいは鉢鐸創那国の都城(六七里)⁽⁷⁾・尸棄尼国の都城(五六里)⁽⁸⁾が挙げられ、これらの都城に匹敵する規模の都市と考えられる。この規模は同巻6に「室羅伐悉底国。周六千餘里。……宮城故基周二十餘里」(大正51 p.899上)とある舍衛城宮城の記述に比すと、かなり小規模な都城であったと推定される。

(1) 『大唐西域記』(大正51 p.952中)

(2) 同(p.952下)

(3) 同(p.871上)

(4) 同(p.871中)

(5) 同(p.871中)

(6) 同(p.872中)

(7) 同(p.940中)

(8) 同(p.941上)

[5] 次にダヴァジャーリカー(Dhavajālikā)について述べる。

[5-1] ダヴァジャーリカーはA文献資料 AN.008-001-008 (vol.IV p.162)では「サンケツヤ山(Saṅkheyyaka pabbata)のダヴァジャーリカー(Dhavajālikā)」とあるのみで、詳細は不明である。ところでこのAN.の註釈書によると「ヴァッタジャーリカーとは、そのように呼称する精舎に於て、である。それは[すなわち、そのような呼称がついたのは]、ヴァッタ林の中に[精舎が]あって、それがヴァッタジャーリカーと呼ばれるようになったという話である(Vaṭṭajālikāyaṃ ti evaṃnāmake vihā-re. so kira vaṭṭavane niviṭṭhattā Vaṭṭajālikā ti saṅkhaṃ gato)」(vol.II p.739)とある。つまり「ヴァッタジャーリカー」とは精舎の名称であると註釈しているのであるが、この‘Vaṭṭajālikā’はAN.008-001-008には‘Dhavajālikā’とあり、PTSテキストの脚注には‘Vaṭṭajālikā’を採る写本もあるので、ここではAN.のテキストにしたがって、「ヴァッタ林(vaṭṭa-vana)」を「ダヴァ林(dhava-vana)」と読み替えても、コンテキストとして差し支えなからう。そうすると‘Dhavajālikā’はダヴァ林の中に囲まれていた精舎を指すことになる。ちなみに‘dhava’は「灌木」の意であり、‘vaṭṭa’は「榕樹」「無花果」の意とされる。

[6] ここでは先のサンケツヤ山と上記のダヴァジャーリカーと称される精舎名との関係について述べることにする。

[6-1] 上記[1-3]ではA文献資料とB文献資料とではサンケツヤの属性が「山」から「僧房」ないしは「寺」へと変遷した事実を指摘しておいた。つまり山名であったサンケツヤが、どのような経緯を経て「サンケツヤの僧房(Saṅkheyya-pariveṇa)」とか「泄坻迦寺」というように僧房や寺の呼び名となったのかということである。

想像の域を脱しないが、この間の推移を次のように考えた。恐らくはじめはサンケツヤ山に比丘たちの修行の場である住処ができ、その住処が「ダヴァ林」の中にあったことから、その住処を「ダヴァジャーリカー(Dhavajālikā)」と呼び習わしていたのが、さらに時代が下るにしたがって、サンケツヤ山にある程度の規模を有する精舎が建築され、これを「サンケツヤの僧房」とか「泄坻迦寺」と呼ぶようになったのではなからうかと推測される。いつからサンケツヤ

の名で呼ばれるようになったかは、少なくとも *Milindapañha* の成立以前ということになるであろう。

[6-2] ところで「ダヴァジャーリカー」、すなわち後の「サンケツヤの僧房」「泄坻迦寺」は上記 [2-1] によりサーガラ城内あるいは城外の周辺にあったと推測されるが、その点を玄奘『大唐西域記』で追ってみると、『大唐西域記』巻4に「奢羯羅故城中。有一伽藍。僧徒百餘人。並學小乘法」（大正51 p.889中）とあり、伽藍としては「奢羯羅故城中に一つの伽藍がある」と記していることから、これに相当するかもしれないが、確証はない。もしこれに比定されるとすれば城内にあったということになるが、不明である。

[6-3] このほか『大唐西域記』の遺跡に関する記述については「伽藍西北五六里。有峯堵波。高二百餘尺。無憂王之所建也。是過去四佛說法之處」（大正51 p.889中）とか、「新都城東北十餘里。至石峯堵波。高二百餘尺。無憂王之所建也。是如來往北方行化。中路止處」（大正51 p.889中）とあるも、この記述以外のことは分からない。

[7] 次にサーガラ城の属した国 (*janapada, ratṭha*) について述べる。

[7-1] マヒサヴァットゥと呼ばれた時代の国については、冒頭で述べたように不明である。

[7-2] サーガラ城が都市として現れるのはB文献資料の *Milindapañha* に於てである。これによれば、ナーガセーナ比丘の師であるローハナ比丘が弟子の彼に次のように語っている。すなわち「サーガラと名づける都城がある。そこにはミリンダと名づける王が統治している (*atthi kho Nāgasena Sāgalaṃ nāma nagaraṃ. tattha Milindo nāma rājā rajjaṃ kāreti*)」（p.014）と。あるいは同書の冒頭には「ミリンダと名づけるかの王は王都サーガラにおいて、あたかもガンガー河が海にそそぐ如く、ナーガセーナのもとに赴けり」（*Milindo nāma so rājā Sāgalāyaṃ puruttame upagañhi Nāgasenaṃ, Gaṅgā va yatha Sāgaraṃ*)（p.001）とあって、このサーガラ城がミリンダ王によって統治され、しかも王都であったとされている。その都は同書によれば「ヨーナカ人のあらゆる物資交易の中心地であるサーガラと名づける都城があった」（*atthi Yonakānaṃ nānāpuṭabhedanaṃ Sāgalannāma nagaraṃ*)（p.001）とあるように、ヨーナカ人すなわちギリシア系の人々の都市となっていたことを伝える。

[7-3] ところが『大唐西域記』巻4になると、奢羯羅古城は磽迦国 (*Ṭakka*) として扱われ、この古城にまつわる伝承として『大唐西域記』巻4では「奢羯羅故城中。有一伽藍。……世親菩薩。昔於此中。製勝義諦論」（大正51 p.889中）とあり、奢羯羅古城の伽藍で世親が『勝義諦論』を作成したと伝えている。あるいは同書巻4の「秣底補羅国」の箇所では衆賢が先輩格の世親を訪問しようとしたとき、「世親是時在磽迦国奢羯羅城」（大正51 p.891下）と伝えている。これらの記述によれば、奢羯羅古城は世親や衆賢が活躍した時代には磽迦国に属する都市であったということになるが、玄奘が訪れたときには、すでに古城として朽ち果て、新しい大城が移築されていたということである。

[8] サーガラ城の地理的位置は次のようになる。

A文献資料では不明であるが、上記 [7] で見たようにサーガラ城は奢羯羅古城と推定されるので、B文献資料の『大唐西域記』の奢羯羅古城と新城との位置関係からサーガラ城の地理的位置が判明する。すなわち『大唐西域記』巻4に「大城西南十四五里至奢羯羅故城」（大正51 p.888中）とあって、新しい大城から西南に14、5里のところにあったとする。現在、その奢羯羅古城は *Śiālkoṭ* に比定されている⁽¹⁾。

(1) 水谷真成訳・玄奘『大唐西域記2』p.120の註(1)、中村元『インド古代史(下)』p.062, p.484参照。

[9] ここではミリンダ王の時代のサーガラ城と磽迦国時代の新しい大城に於ける経済的な状況を述べる。

[9-1] A文献資料には経済的な事情を示す記述は見当たらないが、B文献資料の *Milindapañha* になると「あらゆる物資交易の中心地であるサーガラと名づける都城 (*nānāpuṭabhedanaṃ Sāgalannāma nagaraṃ*)」（p.001）とあって、まず東西交易の基地であったことを伺わせる。しかもこの都市は技術者により計画的に、整然と区画された都市であり、その町並みには人々が行き交い、乗物の往来が頻繁であったことを次のように伝えている。

とりわけ町並みには「多くの高価な品物が商店に満たされ、きれいに並べられていた (*paripūritantarāpaṇaṃ-vividha-dānagga-sata-samupasobhitam*)」（p.002）とあったり、「商店には、カーシやコートウンバラなどに産するあらゆる織物が豊富に置かれて…… (*Kāsika-Koṭumbarakādi-nānāvīdha-vatthāpaṇa-sampannaṃ*……)」（p.002）とあって、店先には豊富な品々がうずたかく並べられ、そこには他国からの交易によってもたらされた織物で満たされていた。さらに「きれいに並べられた各種の美しい花や香料を売る店からは、芳香がただよってきた (*suppasārita-rucira-bahuvīdha-pupphagandhāpaṇa-gandhagandhitam*)」（p.002）とあるように、この都市には草花や香料などの物資も豊富であったことを伝えている。

また「(都市には)貨幣、金、銀、銅、宝石が充満して (*kahāpaṇa-rajata-suvaṇ-ṇa-kāmsa-patthara-paripūraṃ*)」（p.002）とあり、両『那先比丘経』にも「四方買客賣買皆以金錢」（大正32 p.695中、p.705中）と記述されているところから、商業都市としての貨幣経済が営まれていたことを伝えている。なお「四方に面した飾窓に贅美な品を陳列した商人たちの組合が並んでいた (*disāmukha-suppasāritāpaṇa-sīṅgāravāṇijagaṇānucaritam*)」（p.002）ともあり、そのころ商人たちによる組合があったことをも伝えている。

[9-2] つぎに玄奘の伝える磽迦国 (*Ṭakka*) については『大唐西域記』巻4に「磽迦国。周萬餘里。東拋毘播奢河。西臨信度河。国大都城周二十餘里」（大正51 p.888中）とあって、国土の周囲が一万余里、東西を毘播奢河 (*Vipāsā*) と信度河 (*Indus*)⁽¹⁾ に挟まれ、この国の都市は20余里であったと伝える。

また「宜粳稻。多宿麥」（大正51 p.888中）とか、「出金銀鑄石銅鉄」（大正51 p.888中）とか、「衣服鮮白。

補 註

所謂僑奢耶衣朝霞衣等」(大正 51 p.888 中)とあり、作物は米や麦を作り、金や銀や鍮石、銅、鉄といった鉱物を産出する国であり、この国の人々が纏っていた衣服はミリンダ王の時代とそう変わらないことを伝えている。

さらに「此国已往。多有福舍。以贍貧賈。或施藥。或施食。口腹之資。行旅無累」(大正 51 p.888 中)とあって、困窮者や旅人が飲食に事欠かない施設(「福舍」)があったことも伝えているが、これもミリンダ王の時代に「布施堂(varabhavana)」(*Milindapañha*, p.002)という名で、その記述が残っている。

このようにサーガラ城あるいは新しい大城は時代を越えて繁栄した都市として描かれているところから、この地域が東西文化の重要な交流地であったことを伺わせるものである。

- (1) 水谷真成氏はこの信度河は『慈恩伝』に見える旃達羅婆伽河(Candrabhāga)、今の Chenāb 河を指したものであろう(水谷真成訳・玄奘『大唐西域記2』p.118)という。尚、「旃達羅婆伽河」は「栴達羅婆伽河」(『大慈恩寺三藏法師傳』卷二 p.231 下)とある。

[10] 最後に本稿をまとめると、「サーガラ(Sāgala)」は原始仏教聖典時代には「マヒサヴァットゥ(Mahisavatthu)」と称される地域であったが、ミリンダ王の時代には王都「サーガラ」として大いに栄え、玄奘の訪れた時代には磔迦国(Ṭakka)の首都である新大城から西南に14, 5里離れた「奢羯羅故城」(現、Śiālkoṭ)としてその名をとどめていた。一方仏教僧伽の歴史としては、この地は最初サンケツヤ山(Sankheyyaka pabbata)のダヴァジャーリカーと称される比丘たちの住処にはじまり、その後ミリンダ王の時代には「サンケツヤの僧房(Sankheyya-pariveṇa)」とか「泄坻迦寺」と呼ばれるような仏教の修行研鑽の地として、多くの僧伽藍が建設されるようになったと考えられる。

(金子 芳夫)